

ロシア・モスクワ日本人学校の教育と国際理解教育

釧路市立鳥取小学校 中原英雄

1 ロシアの概要

人口 1億 4800 万人

面積 1707 万平方キロメートル（日本の約 45 倍）

民族 100 以上（ロシア人、ウクライナ人、白ロシア人、カザフ人、タタール人など）

宗教 最大宗派はロシア正教（共産時代時代の宗教弾圧が終わり、各地に教会の修復が進んでいる）

経済 1991 年のソ連崩壊以来、エリツィン大統領の急進的な改革によってロシア経済は混乱に陥った。ルーブル崩壊、急速なインフレが襲った。しかし、ここ数年経済は安定に向かい、ルーブルも安定し、インフレ率も低下傾向にある。GNP もこれまでのマイナス成長を脱した。しかし、賃金未払いや税収の確保など、問題は山積している。

2 モスクワの概要

モスクワは北緯 55 度 40 分、北海道よりはるか北、カムチャツカ半島の中央部とほぼ同じ緯度にある。気候は大陸性で、夏は気温が 30 度を超すことも多い。夏至のころは午後 11 時ごろまで明るい。

一方、冬は長く寒さが厳しい。10 月には初雪を見る。厳寒期は氷点下 20 度を下回る日が続く。降雪量は多くないが、日照時間が 6 時間ほどしかない上、曇天の日が多い。

モスクワはロシアの首都らしく広大な都市で、中央にはクレムリンがそびえる。政府要人がクレムリン入りする時は道路が封鎖され、大渋滞になることもしばしばである。

街には重厚な建築物、博物館や美術館が多くある。最近は看板やネオンが増え、10 年前の町並みと比べものにならないほど、明るく活気がある。

生活面では外資系のスーパーマーケットやファーストフード店、日本食レストランが急速に増え始め、食糧事情や衣料事情が改善されつつある。しかし、劇場占拠事件やワールドカップサッカーの後の騒乱、ネオナチによる外国人排斥運動など治安は悪化傾向にある。

3 現地の教育事情

ロシアは世界有数の教育普及国であり、文盲はほぼいない。ロシアの現地校は 1～11 年生までで、日本の小・中・高が一緒になったような形態である。1～4 年生までが初等部、5～9 年生までが中等部で、ここまでが義務教育。そのあと 2 年間の高等部があり、これを卒業すると大学入試を受けられる。

6 月からは 3 ヶ月の長い夏休みに入る。新学期が始まる 9 月 1 日には先生に花を贈る習慣がある。この他英語や数学、物理、また音楽やバレエ、スポーツ、サーカスなどの専門の学校に通う子どももいる。

学習内容は日本より 1～2 年先を行くと言われ、家に帰っても家庭教師を招いて数時間学習するのが当たり前と聞く。

4 ロシア・モスクワ日本人学校の特徴

日本人学校が唯一の日本の教育機関で、補習授業校や日本の私立校はない。モスクワ日本人学校は1967年に創立されたヨーロッパでもっとも歴史のある日本人学校である。児童生徒数は140名を超えた時期もあったが、ここ数年減少傾向にあり、80~90人を推移している。現在は14名の本邦派遣教員と16名の現地採用職員のほか、6名の時間講師が勤務している。

小学部ではロシア語の授業が週2時間、英会話の時間が週1時間設定されている。また、中学部では英会話の時間が2時間、ロシア語の時間が年35時間設定されている。

2000・2001年度は文部科学省指定の海外子女教育研究協力校として研究に取り組んだ。

研究主題は「在外における教育相談のキーステーションとしての日本人学校」であった。

本校はモスクワと言う特殊性から来る様々な子どもの不安を解消する必要があった。さらに子どもを取り巻く様々な問題や課題を解決する必要があった。教科指導のみならず、心身の健康やストレスの解消、学校やモスクワでの生活への適応、限られた生活環境の中での体力の低下や体験の不足など、あらゆる面で学校が支援していかなければならない状況であった。

そこで、この2年間では、まず教師の教育相談員としての資質向上のため、道都大学講師の小澤康司氏を迎え、教育相談に関する研修を行った。また、「対処療法的なカウンセリング」から「予防的なカウンセリング」を目指し、「カウンセリングマインド」を生かした授業を心がけるとともに、構成的グループエンカウンターを積極的に取り入れた。

さらに教育環境改善のために、進路進学班、日本語指導班、ふれあい体験班を作り、課題を解決すべく取り組んできた。

5 モスクワ日本人学校での国際理解教育の取り組み

現地理解教育には大まかにいって二つに分けられる。

一つは現地理解を直接的に目標とする学習。主に修学旅行や遠足などである。これを直接的現地理解学習とする。学校行事と総合的な学習に分けて記述していくことにする。

もう一つは教科、道徳、特活、総合などそれぞれの目標に到達するために活動する中で間接的に現地を理解する学習。主に社会科見学や地域素材を教材化した学習などである。これを間接的現地理解学習とする。

本校の現地理解教育の実践はいかなるものか概要を以下に示していく。

直接的現地理解学習 学校行事

中学部修学旅行 中学部1~3年 4泊5日

平成14年度 行き先 サンクトペテルブルグ

ロシアの歴史を中心に学習することができた。ピョートル1世、エカテリーナ2世、ニコライ2世、レーニンなど革命までの流れについて学ぶことができた。また、ロシアの歴史的な建築物を見学することができた。

平成13年度 行き先 リトアニア

旧日本大使館、第9要塞などを回り、杉原千畝氏の働きや人権や命にかかわる学習ができた。

小学部修学旅行 小学部5・6年

平成14年度 行き先 ロストフ・ヤロスラブリ・コストラマ

ロシアの七宝焼きの製作過程を見学したり、ロシアの画家レビタンの絵画を見たり、ロシアの古代の歴史を体験するなど総合的な学習ができた。

平成13年度 行き先 スズダリ・ウラジーミル

12世紀以後の古い街並みがそのまま残っている。多くの修道院や教会を見学し、ロシアの歴史を学ぶことができた。

小学部遠足 小学部1～4年

平成14年度 カローメンスコエ

世界遺産カローメンスコエでロシアの特徴的な建物を見たり、ピョートル1世の小屋を見たりすることができた。

平成13年度 戦勝記念公園

第二次世界大戦の勝利を記念する大きな公園で高い塔や美しい噴水、戦車や戦闘機を見学できた。



中学部社会見学 中学部1～3年

平成14年度 モスクワ市内職場体験学習

モスクワ市内にある日系の企業に半日訪問して、職場体験をした。

平成13年度 グジェリ工場

ロシアの焼き物グジェリの作成過程を見学することができた。見学する前に事前学習も行い、グジェリについて自ら調べることができた。

平成12年度 毛皮工場

ロシアの毛皮を作っている工場に見学しにいった。ロシアではなぜ毛皮が必要なのかを学び、製造過程を学習することができた。

体験学習 全校児童生徒

平成14年度 ソフホーズレーニンでのイチゴ狩り

平成13年度 ソフホーズレーニンでのアセロラ狩り

平成12年度 コルホーズでのニンジン掘り

ロシアの集団的農場や国営農場に出かけ、大規模な農業を見学するとともに自分で収穫し体験することによってロシアの農業を学ぶことができた。

鑑賞教室 全校児童生徒

平成14年度 音楽鑑賞

音楽鑑賞ではロシアの音楽学校に行き、同じ年代の子が奏でる音楽を鑑賞する。また、平成13年度、14年度と日本国大使邸においてロシアの子どもたちの素晴らしい音楽を鑑賞している。

平成13年度 民族舞踊鑑賞

民族舞踊では本校に楽団が来てくれて、美しい衣装と素晴らしい踊り、歌を聴かせてくれた。ロシアの伝統的な音楽のよさ、コサックダンスなどの伝統的な踊りの躍動感や美しさに驚いていた。

平成12年度 サーカス鑑賞

サーカス鑑賞では本校体育館にてロシアの伝統的なサーカスの高度な技を見せてくれた。子どもたちと同世代の少年の演技に驚いていた。

スポーツ交流

不定期ではあるが、モスクワにある外国人学校とスポーツで交流を行っている。スポーツを通して友情を深めている。

平成14年度 イタリアンスクールとのサッカー交流

平成13年度 イタリアンスクールとのサッカー交流

アメリカンスクールとのサッカー交流

アメリカンスクールとのバレーボール交流



文化交流

モスクワの現地校および外国人学校と文化交流をしている。

1239番校との定期交流は総合的な学習に移行したので後述するが、この文化交流は他国の子どもたちや教育、文化を理解する上で役立っている。

ルーシア祭参加 小学部1～4年

毎年12月に行われるスウェーデンスクールのルーシア祭に参加している。

過去に同じ校舎にいたこともあり、交流は続いている。

節分集会 小学部1～6年

毎年2月に行われる本校の節分集会にスウェーデンスクール・イタリアンスクール・ユゴスラビアンスクールを招待して交流を深めている。

直接的現地理解学習 総合的な学習

総合的な学習 小学部3年以上各学年

平成14年度から本格的な実践をしている。計画の中には現地理解を目標にしている内容が多い。

小学部3年 「モスクワの自然を知ろう」

「モスクワの街や人を知ろう」

「モスクワの冬を知ろう」

小学部4年 「モスクワの子どもたちを知ろう」

「モスクワの食を調べよう」

小学部5年 「モスクワの産業を知ろう」

「モスクワの環境について調べよう」

小学部6年 「ロシアの歴史を知ろう」

「モスクワガイドブックを作ろう」

中学部 「サンクトペテルブルグの旅」

「モスクワ日本人学校のホームページを作ろう」

ロシアの優れた人材に来校していただいて多くのことを教えていただいている。今後さらに発展していくと思われる。



1239番校との定期交流 各学年

平成14年度から総合的な学習の一環で行われることになった。

一年に一回、隔年で本校と1239番校に訪問しあい、交流を深めている。

本校に招待したときの内容は、

- ・自己紹介 ・習字 ・折り紙 ・名刺交換 ・スポーツ交流
- ・日本の伝統的な遊び交流(コマ、あやとり、けん玉、はねつきなど)

などである。2 学年合同で実施しているが、深く交流できた学年もあれば、逆になかなか交流できずに苦労している学年もあった。しかし、それも学習であり、次年度の課題となって総合的な学習で取り組むことになる。

相手校に行ったときは、学校の紹介（医者がいたり食堂があったりして驚く）や授業に参加するなどロシアの学校の雰囲気を味わうことができた。

進路生き方学習 全校児童生徒・中学年

進路学習の一環として、現地で活躍する人に来てもらい、貴重な話をしていただく機会がある。平成 13 年度はポリショイバレエで活躍する岩田さん、同年代の冒険兄弟ジーマンの話を聞いた。また NHK の歌のおおねえさんだった小牧さん親子の歌を聴く機会もあった。

このほかにも行事と教科の目的を達成することを目標にしつつ現地を理解する実践を行ってきた。これを「間接的現地理解」とし、写生会や運動会などの行事のほかに、各教科の様々な分野で現地の素材を取り扱ってきた。例えば生活科に代表される現地素材を生かした学習である。ここでは内容の詳細は省略するが、図工やクラブで現地の方々に来ていただいてロシアの文化を学ぶことができた。また、スケート教室をモスクワ有数のリンクを借りて学習した。コーチも一流であり、貴重な経験をすることができた。しかし、治安面の不安や契約の難しさもあり、校外での学習はなかなか思うように実践できなかったのが実情である。

6 力を入れて取り組んだこと

スケート学習

モスクワの冬は釧路の環境に類似している。雪は少なく、気温は低い。

冬の体育もグラウンドにリンクを作り、スケートを学習する。しかし、教師の中にスケート経験者は稀である。

私は釧路生まれ釧路育ちなので、幼いときからスケートを履いて滑ってきている。教師になってからもスピードスケート少年団の指導を 7 年間やってきた。

日照時間が不足し、運動不足になりがちはモスクワの冬をなんとかかしたいと思い、スケート指導に力を入れた。

決してうまくはないが、初心者の方よりかははるかに慣れている。また、ある程度指導法も心得ている。そこで、「スケート指導のてびき」を作成し、先生方と子どもたちに活用してもらうことにした。

「スケート指導の手引き」は全 24 ページからなる。中には学習カードが入っていて、初級、中級 A、中級 B、上級の 4 つに分かれたカードをリンクの壁に貼り、学習に生かしてもらった。

男子はアイスホッケー、女子はフィギュアが多かったが、まだまだ基礎的なスケートングを学ぶ必要があったので、学習カードはフィギュアの検定テストを参考にして作成した。

また、「スケート指導の手引き」には、気温と学年に応じた靴の着脱する場所の紹介や、スケート靴の管理、着脱のコツなども含めた。

実技研修も毎年行った。先生全員に対して丁寧に指導すると、どの先生も楽しいと言ってくれた。また、練習方法を伝授し、普段の学習に生かしてもらった。

3 年目の冬は私のスケート学習をビデオにとってもらい、それを学校に保管して次年度からの指導の参考にしてもらう予定である。

総合的な学習

平成 12 年度に派遣されたが、本校は平成 14 年度本格的に実施される総合的な学習に対して何の準備もしていなかった。また、平成 12 年度においても研修項目からはずされていた。

私は過去 3 年間、阿寒町立中徹別小学校において総合的な学習の研修と実践を積んでいたののでその成果を還元したいと申し出たが、なかなか理解されず思うように進まなかった。

本校は情報教育、進路・進学に対する対応、英会話など、各国の日本人学校が特に強調して進める分野に対しても何も手をつけていない状況であった。

低学年を担当していたこともあり、総合的な学習の試行授業もできず、もやもやした気持ちで 1 年を過ごした。日本人学校でありながら全ての面で遅れを感じた 1 年間であった。

2 年目になり、研修の授業研究部長になった。研修内容は教育相談だったが、部会内では並行して総合的な学習の計画作りと実践を進めた。

また、過去の研究の財産がまるで伝わっておらず、現地理解のための素材を一から探し求めることを始めた。また、授業を公開し、総合的な学習の進め方を紹介した。(私が公開するまで、総合的な学習という題目の学級活動を 1 時間実施し、総合をやっていますと言う人が 3 人と、1 回も実践したことのない人ばかりだった)

私は年度末に「モスクワ日本人学校のチャレンジ学習(総合的な学習)」という冊子を「スケート指導の手引き」と一緒に作成し、全教員に配布した。この冊子には総合的な学習の計画をその成果が出て、14 年度から本格的実施される総合的な学習の基盤を作ることができた。

ソーラン節

現地理解を進めることは大事なことであるが、一方では自国文化を堂々と表現できる子どもにもなってほしいと願っていた。私はソーラン節を教えることができたので、それを広め、どこに行っても自信を持って挨拶代わりに踊れるような子どもになってほしいと思っていた。平成 12 年度末に担任していた小学部の 2 年生に教え、それを卒業式後の祝会で披露した。そこに参加していた領事部長が感激し、平成 13 年度、モスクワで行われる五輪招致委員会のレセプションで披露できることになった。

これで全校的に呼びかけることができるようになった。小 4 以上中 3 まで 24 名が昼休みにホールに集まり練習した。この練習が始まると、今まで弁当を食べるのが遅かった小学部 1 年生も一緒に踊りたくて早く食べるようになった。いつのまにか全校的な活動になった。

招致委員会では「ここに来て子どもたちのソーラン節を見ることができたのが一番の思い出です。ありがとう。」と大阪の方々には口々に感謝の言葉を子どもたちに投げかけてくださった。

ダイナミックで思い切り踊った本校の子どもたちの様子は、テレビや北海道新聞にも紹介された。子どものみならず、保護者や日本人会にもいい影響を及ぼすことができた。

また、父親が報道関係に勤め、当時危険だったアフガニスタンに取材に行き何日も帰ってこない子の精神状態が不安定になった。そんな時、昼休みに大好きなソーラン節を有志と一緒に踊り、この子達を元気付けることができた。

学習発表会では、私のクラスが劇の中でソーラン節を踊ることになっていた。しかし、みんなで踊りたいという声上がり、踊りたい子全員をモスクワ大学のステージに上げ、一緒に楽しく踊ることができた。

平成 14 年度の運動会では、全校児童生徒によるソーラン節を披露。学習発表会や修学旅行の現地校との交流では中学部が元気いっぱい踊りを披露した。

子どもたちの中にしっかりと根を下ろし、生き続けてほしいと願っている。